

拝啓 今年も早や11月下旬となりました。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。近所の公園では、紅葉がきれいな場所があります。

今回は、小西芳之助先生の『エペソ人への手紙講解説教』からの引用の第6回目です。今回のエンカウンターの4頁「贖いがキリスト教の中心、内村鑑三から教わった」には、次のように書かれています。

「贖いがキリスト教の中心、内村鑑三から教わった

よその宗旨の話をご参考に申し上げますと、親鸞が法然に会った時、『高僧和讃』の中に自分の先生のことを、「真の知識に会うことは難きが中になお難し」と言った。本当の先生に会うということは難しい中にも難しいと。親鸞は、最も難しいことだと言った。

私は幸いに内村鑑三に会った。もし私が内村鑑三に会わなかったなら、贖いは分からなかったでしょう。贖いがキリスト教の中心であるということは、内村鑑三に教えてもらった。もしも内村鑑三に会わなかったら、きっと私は、良い行ないをすることぐらいがキリスト教と思っていたことでしょう。しかしキリスト教というものは、贖い、永遠の命をもらうことである。天国へ行って復活することであることを内村鑑三から学んだ。聖書の文句によって、ロマ書の文句によって。よろしいか。意外なことを内村鑑三は言っているんじゃないですよ。」

小西先生の言い方を真似るならば、私は幸いに小西芳之助に会った。もし私が小西芳之助に会わなかったなら、キリスト教は分からなかったでしょう。…」と、小西先生における内村先生と、私における小西先生が、同じ位置におられます。小西先生を私に紹介してくれた学生時代の友人阿部達雄君に対する感謝の思いは、生涯消えません。

この一月に読んだ『一日一生』等の本から、感銘を受けた言葉を紹介します。

小西芳之助先生『主の御名を呼ぶ』11月13日

「聖書の唯一の問題

イエスは、ルカ伝10章38-42節において、「唯一のことが必要である」と言われた。

私は、内村鑑三先生より、その「唯一のこと」とは、我らに対するイエスの贖いであることを教えて頂いた。そして、今、過去28年間の聖書の勉強を通して、また57年間の信仰生活を通して、内村先生の言葉の真理なることを知るのである。

コリント人への第1の手紙12章3節後半にいわく、「聖霊によらなければ、「イエスは主である」と言うことができない」と。

神よ、聖霊を降し給え。そして聖書の唯一の問題を本当に深く理解させたまえ。」

新渡戸稲造先生『一日一言』10月21日

「西暦1805年の今日、英将ネルソンが戦死する間に、「予は予の義務を尽くせり」と叫んだ。際限なきは勤めなり。一つ済むと思えばまた一つ。それを果たせばまた新たに起こ

る。かく、勤めは無有限数なれども、ありがたき事には、幾つもある勤めが同時には来ぬ。故に一つずつ尽くしていけば、たくさん余りあるとも、天も人も己も責めぬ。」

松下幸之助先生『道をひらく』「世の宝」

「明智左馬之介光春が、堀監物に城を完全に包囲され、今はこれまでと観念した時、場内にあった数々の秘蔵の名器を場外におろし出し、「あたら灰となすに忍びぬ品々、貴公の手を経て世にお戻しいたしたい。お受けとりあれや」といったことは、『太閤記』にもある有名な話である。…

世の宝は何も秘蔵の名器だけではない。お互いに与えられている日々の仕事は、これすべて世の宝である。世の宝と観じて、私心にとらわれることのない働きをすすめていくために、光春のふるまいを今日もなお、大いに範ととしたいものである。」

内村鑑三先生『一日一生』11月19日

「キリスト教は道徳ではない。贖罪である。教理ではない、奇跡である。説伏せられて信ずるのではない。神の強き手に捕えられて、その従者となるのである。「この類は、祈祷と断食とによるにあらざれば、成ることなし」(マタイ伝 17・21) とある。人の取る手段としては、ただ熱き祈祷があるのみである。そうしてわれらの祈祷に答えて、神の奇跡が施されて、ここに真の伝道がおこなわれ、真の信者が起こるのである。」

バークレー先生『ウィリアム・バークレイの一日一章』(10月31日)

「ピレモン

いろいろな意味で、ピレモンへの手紙は新約聖書中もっともふしぎな文章である。オネシモという逃亡奴隷に関する小さな個人的な手紙が、新約聖書のなかでどんな役割を果たしているのだろうか。

そこには教理もなければ神学もない。それは、主人からなにかを盗んで逃げた奴隷に関する短い、個人的な手紙である。その奴隷はパウロに会って改心したらしく、やがて自分の名前にふさわしい生活をするようになった。オネシモというのは「役に立つ者」という意味である。

なぜこんな手紙が新約聖書の中に入ってきたのだろうか。確実に分らないが、推測は出来る。パウロの諸書簡が収集・編集され、1巻の書として公刊されたのは、紀元90年エペソにおいてであった、と学者たちは考えている。それから何年か後、アンテオケの監督イグナティウスはアジアの諸教会に手紙を書いていた。その時イグナティウスは、ローマに連れていかれるところで、やがてはローマの競技場で野獣の群れのなかに投じられる運命であった。

それらの手紙の中に、エペソの教会に宛てたものがある。その手紙はエペソの監督——彼の美しい性格、その名前にふさわしい彼の生涯の有益性——に対して、めったに見られな

いような最高の賛辞を呈しているのである。

ではそのエペソの監督の名前は何か。オネシモである。

逃亡奴隷オネシモとエペソの監督オネシモとは同一人物である、と信ずる学者たちがいる。パウロの手紙がエペソに集められたとき、オネシモは、自分がかつてなんであったか、またイエス・キリストが自分のためにどういうことをして下さったかをみんなに知ってもらうために、このピレモン宛ての小さな手紙をパウロの書簡集に加えるように主張したので——学者たちはそう考えているのである。」

レター・B・カウマン先生 『荒野の泉』10月13日

「わたしたちは「何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに感謝をもって祈りと願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申しあげるがよい」という聖言を傾聴すべきである。…

またわたしたちが夜中に目さめた時、霊的本能ともいうべきものによって神に向かい、神に語り、眠られない夜中にも、神の前にさまざまな小さいことを持って来て、家族、取引、職業などにかかわる困難を持ち明ける事も含んでいる。どんな道で、何が私たちを試みても、これについて主に語るべきである。」

10月24日、本誌読者の佐藤昭夫さんの運転する車で、島田公博さんとともに、中央アルプス宝剣岳の麓まで行き、千畳敷カールから宝剣小屋まで登って来ました。昔歩いた南アルプスの山々が反対側から全部見えて、感激しました。

11月14日には、同じ3人で、松本市の郊外美ヶ原の王が鼻へハイキングして来ました。途中は曇りだったのですが、高度1000mを超したあたりから晴れて、王が鼻では、北アルプスの白馬岳から常念岳まで、よく見えて感激しました。途中美鈴湖付近の紅葉もきれいでした。

新型コロナについては、病院やクリニックではマスクをつけるように指導されていますが、電車の中とかスーパーでも、マスクをしない人の方が多くなりましたが、外出された後の手洗い、うがいなどは、実行されて、コロナやインフルエンザにかからないように充分注意されるよう、祈り申し上げます。

2024年11月19日

山口周三

エンカウンター読者各位